

一人称から歩み直す「戦争体験」

—体験心理学に基づく歴史・平和教育の構築に向けて—

村川治彦
関西大学准教授

未体験の戦争体験の継承

「過去に目を閉ざす者は結局のところ、現在にも盲目となります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、また新しい感染の危険への抵抗力を持たないことになるでしょう。」これは、第二次世界大戦終結 40 周年の式典でドイツ大統領ヴァイツゼッカーが行った有名な演説の一節だ。それから 25 年以上経った今も、ヴァイツゼッカーのこの言葉は、ぼくたち日本人に大きな意味を持っている。

歴史社会学者福間良明（2009）は、「戦争体験の戦後史」の中で、戦争体験を巡る戦前・戦中世代と戦後世代の間の葛藤が戦争体験の断絶を生み出した過程を詳細に描き出し「戦後において戦争体験が一種の『教養』であり、直接的な戦争体験をもたない、戦後派の若者にとっては象徴的な暴力として機能し、それゆえに、『戦争体験という教養』は若い世代の支持を失ったのである」と指摘している。福間が明らかにしたように、戦後日本社会において戦争体験は、『反戦』『平和』につねに調和的であったわけではない。戦争を直に体験した世代にとって、戦争体験は容易に言葉で語りうるものではなく、それ故にときに『反戦』の政治主義を批判する」根拠となり、戦後世代との「戦争体験をめぐる世代間の激しい軋轢」を生み出した。そうした批判や軋轢は、戦争体験を受け継ぐことの複雑な様相を示しているが、福間はこの複雑な様相を「そうした断絶や齟齬の局面にこそ、幾多の可能性が浮かびあがっていた」と肯定的に捉え、次のように述べている。

戦争体験は風化や断絶を重ねてきた。しかし、それは、伝承や継承の不可能性を示唆するものではない。むしろ、断絶の戦後史を直視するところに、記憶の継承や再生の契機が宿っているのではないだろうか。未来は、過去の過ちや、あり得たかもしれない可能性を直視するところから、初めて切り拓かれるものである (p.262)

南京事件から74年、第二次世界大戦終結からも65年以上が経った今、自分が生まれる以前の戦争体験をどのように自分の生き方に反映させていくのか。戦争責任、戦争体験の継承とはどのような形で行われるのか。あるいは「日本人として」謝罪することの意味とは如何なるものであるのか。それらの答えを見出すためには、福間が述べるように「断絶の戦後史」を直視し、「風化や断絶を重ねてきた戦争体験」とどのように向き合うのかを改めて探っていかなければならない。そこから、21世紀を生きる私たち一人一人が戦争体験をどのように継承していくのかを見出していくこと、それが盲目にならずまた抵抗力をもつために私たちに課せられた課題ではないだろうか。

一人称の語り①：「脱歴史的な身体」

戦後18年が経って生まれた僕が、自分の中の歴史の問題と向き合うようになったのは、アメリカの大学院で受講した「社会的な身体」をテーマにした授業がきっかけだった。Somatics (一人称の観点から身体／心のあり方を探っていく分野) 研究の第一人者であり、身体心理学・社会学的研究の先駆者の一人でもある Don Hanlon Johnson (1992) が行っていたその授業では、Susan Griffin (1992) のピューリッツァ賞候補作「A Chorus of Stones」を毎回読んでエッセーを書いてそれを発表することが中心であった。その初回に、同世代のドイツ人とユダヤ人が、それぞれに背負っている歴史の重さについて絞り出すように語るのを目の当たりにした時、自分が彼らのように歴史を切実な問題として実感していないことに、愕然とした。

それまで僕自身、盧溝橋、南京、真珠湾、広島・長崎などで起こった出来事を知識としては知っていても、今の自分と直接つながりのあるものとは受け止めていなかった。1937年12月13日、1941年12月8日、あるいは1945年8

月6日といった日付けは、大化の改新や鎌倉幕府成立の年号ほどにも記憶の対象ではなかった。過去の戦いの場面といえば、大河ドラマに出てくる関が原の戦いや戊辰戦争が思い浮かんだ。原爆資料館に行ったこともあり、真珠湾のフィルムも南京の写真も見たことはあっても、それを見た経験が自分の生き方を変えることはなかった。祖父母や両親の世代が経てきた戦争と、自分の中や日本社会の暴力性、今この時に世界中で起こっている戦争を結びつけることはできなかった。

教育や医療などの社会システムは、身体訓練を通して個人の意識の底にある感じ方や考え方の枠組みに特定の規範を刻印していく。Johnsonの授業でフォーコーが見いだした「社会的身体」という視点を学んだとき、過去の歴史と今の自分のつながりを実感できないこと自体が、日本社会の中で生まれた僕の「社会的身体」であることに初めて気づいた。そして、過去と切り離されて今を生きていると感じている自分の社会的身体を、僕は（西田幾太郎をもじって）「脱歴史的な身体」と呼ぶようになった。

他者の痛みへの共感や複雑な社会状況への想像力を持たずに、過去の出来事についての知識をただ蓄積することは、身体の脱歴史的性を深めてしまうだけのように思う。たとえ教科書に戦争時の記述が増えたとしても、一方で歴史を実感できない「脱歴史的な身体」を育まれている状況では、それをいくら知識として蓄積しても不十分なのだ。日本人が行った侵略戦争の犠牲者、キノコ雲の下の被爆者、あるいは東京大空襲で逃げ惑った人々。戦争という大きな歴史の波にもまれながら苦悶した人々の声に直に触れたとしても、僕のような「脱歴史的な身体」はそうした声に共感する力を持ち合わせていない。

そうした「脱歴史的な身体」から脱却し、自分を育んできた過去を自分のものとして実感し、近隣の人々とより深いところでつながるためには、自分の中に湧きあがってくる感情に正直に向きあい、他者や自分自身の感情をしっかりと受け止める「歴史的な身体」を育むことが必要なのだ。自らを育んできた複雑な歴史（それは、また自分の中の暴力性にもつながっている）に気づき、その歴史を自らの生と繋がった現実の延長として捉えることができる「社会的な身体」を育む歴史教育こそが、歴史を記憶しそこから学ぶための基盤となるべきだ。僕はそう考え、1996年サンフランシスコで「日本が第二次大戦中にアジアで行っ

たさまざまな行為が、今の私たちにどのように影響しているかを探る」アジア・ワールドワークを主催した。(村川 2001b)

体験的心理学の必要性

ハーバード大学の Eugene Taylor (2000) は、心理学の歴史を experimental (実験) clinical (臨床)、and experiential (体験) の三つの流れに分け、それぞれが重なり合いながらも独自の発展を遂げてきたことを明らかにした。体験的心理学 (Experiential Psychology) は、19 世紀アメリカの心理的・精神的伝統にルーツをもち、ヨーロッパからの深層心理学や実存主義哲学などの影響を受けて 1960 年代以降人間性心理学、ソマティクス、トランスパーソナル心理学、ホリスティック医学・統合医療として発展してきた。

体験的心理学では、デカルト以来の心身二元論や主観と客観を分ける主客二元論に基づく実験心理学のアプローチ、あるいはあらゆる心的現象を個人の内面に還元しようとする心理学主義などを批判し、人間を心・身体・精神からなる全体的存在として捉えている。こうした体験的心理学の流れに属し、ユング派の心理療法家である Arnold and Amy Mindell 夫妻が行うグループワークに「ワールドワーク」がある。ワールドワークは、「個人の内面と集団のダイナミックスをひとつのプロセスとして捉える新しい視点を心理学にもたらした。(中略) 人種差別やジェンダーの問題、あるいは民族紛争などの深刻な対立において、どちらかを善あるいは悪としたり、抑圧者と被抑圧者を分けてその和解を求めるのではなく、第三の視点としての「場」を設定し、「場の癒し」を行おうとしている」(村川 2001b)

三人称的な立場から知的な分析や解釈を行うのではなく、一人称の立場から体験を探求する体験心理学の立場では、自らの体験を理性で判断したり反省する以前に、まずはありのままに受け入れることを奨励する。一人一人の体験は本質的に異なるという前提に立ち、個人の体験を絶対的な基準によって「善い悪い」とか「正誤」という価値判断を下すことはしない。しかし、「体験」はそこで絶対化されるのではなく、それがどのような意味をもつかを探るためには、その体験を反省し分析するプロセスも必要である。その意味で体験的心理学における「体験」は、実感を伴った「実験」であり、その体験をありのまま

に受け入れたうえで、そこから他者とコミュニケーションをとりながら、協働して生きていくかを探っていくためのきっかけに過ぎない。体験と思考・反省は、循環的なプロセスを形成するのだ。

体験心理学の立場をとるミンデル夫妻のワールドワークでは、個人と集団、善と悪、加害者と被害者といった二元的な立場を止揚する契機として「場のダイナミックス」を強調する。このような新たなアプローチによって戦争に関わる複雑な問題を丁寧に拾い上げていくことが、先に述べた「脱歴史的身体」を乗り越える「新たな歴史教育」を生み出す可能性をもっている。

一人称の語り②：「感情を伴う今としての歴史」

僕が「脱歴史的身体」を探求するために「ワールドワーク」というアプローチを選んだのには理由があった。1994年に初めてミンデル夫妻のワールドワークに参加したとき、僕は自分の中に、「集団の中で自分を解放したときにわき上がる生（性）の快感と結びついた暴力性」が深く沈み込んでいることに気づいた。個人としての僕を周囲の人はあまり暴力的だとは思わないかもしれない。だが、日本人という集団の中で僕が感じた暴力性は、戦前の日本軍が行った残虐行為と同じ行為を行う可能性を自分自身に突きつけた。それは、「戦前の日本兵」が行った残虐行為が、決して「日本人」の問題でも、「祖先」の問題でもなく、他者を抑圧し暴力的に扱おうとする衝動に僕自身がどのように直面していくのかという問題なのだ、ということを教えてくれた。

1996年、アメリカでこのアジアの戦争問題をテーマにしたアジアンワールドワークを開催したことをきっかけに、僕はちょうどその頃中国系アメリカ人の市民運動として大きな流れになりつつあった、日中戦争の歴史をアメリカ社会の中で認知させようという運動に関わるようになった。（村川 2001a）こうした活動を通して中国系アメリカ人や731部隊の人体実験の被害を被った米国退役軍人、アイリス・チャン、そしてある時は日本で東中野修道氏らと親しく話をする機会をもつことができた。また時にはサンフランシスコで行われた日中戦争の犠牲者の慰霊祭に日本人として献花して欲しいといわれて出かけたこともあった。こうした経験を通して、僕は70年前の戦争がまったく過去のものではなく、今まさに生きている多くのアジアの人々にとって激しい感情を伴う「現

在」であることを思い知った。

1996年にサンフランシスコで行ったアジア・ワールドワークに参加した人の何人かは、その後も強い意志でこの問題に関わり続けた。その一人棚橋一晃さんは、南京に行かねばならないという思いを抱いて、アイリス・チャンの紹介を得て2000年に南京師範大学の張連紅氏を訪れ、南京事件70周年の2007年に南京で国際会議「Remembering Nanjing」を開催した。(Tanahashi 2007) この会議は、「異なった戦争体験と教育を受けた、日本人、中国人、およびほかの国の人々が、日中戦争と南京の悲劇について、心を開き、互いの声を深く聴くこと」を目的にしていた。そして、参加条件に「歴史解釈の多様性を考慮し、会議としての統一的歴史解釈は行わず、自分が知らないことがあるという事実を受け入れる。つまり、自分の固定した考え、意見、および見解をいったん脇に置いて、様々な見解に心を開いてみる。相手の心情にまずは深く耳を傾けることを基本原則として、参加者個人がそれぞれの見解、感情を表現することを奨励する」という体験的心理学の視点を活かしたこれまでにない枠組みをもったものだった。

一方同じくアジア・ワールドワークの参加者であったドラマセラピスト Armand Volkas も2007年来日し、立命館大学平和ミュージアムで日本の戦後世代の戦争体験をテーマとして彼の *Healing the Wounds of the History* を応用したワークショップとプレイバックシアターを開催した。この時行ったプレイバックシアターの冒頭で、老年にさしかかった一人の日本人が、「日本人は加害者である前に原爆によって多くの命を失った」と強烈な感情を伴った声をあげた。その感情表現は怒りのようでありながら、どこかに哀しみを感じさせるもので、被害と加害が幾重にも折り重なって表現されないまま多くの日本人の中に残っていることを実感させた。また、こうした公の場で表現された強い怒りの感情も、プレイバックシアターでは、否定されることなくしっかりと受けとめられ、一つの声として尊重されることが感じられ、そこから今回のセミナーの開催へと連なる流れが生まれた。

身体に刻まれた記憶と感情

ホロコースト、ベトナム戦争をはじめさまざまな紛争や民族浄化に関するト

ラウマ的な出来事の社会的記憶についての学際的研究の先鞭をつけた Kleinman ら (1997) が示すように、戦争における暴力は、平和な社会になっても加害・被害を問わず個人の精神的な病や心身症として影響を残す。そうした暴力はそれらを直接的に経験した個人に留まらず、家族を巻き込み、個人レベル、認知レベル、それに身体行為レベル (performative) の3つのレベルで、その後の世代に伝達されていく。(Connerton, 1989) ところが、東アジア地域における従来の歴史教育や平和教育では、Connerton のいう個人的、認知的レベルで戦争体験の悲惨さを伝え、戦争の「客観的事実」を解明することには重点が置かれてきたが、たとえば家庭内暴力などのように身体行為レベルで伝達されてきた社会的記憶には眼を向けてこなかった。(張, 2010) また、これまでのトラウマ治療は個別治療が中心であり、個人のトラウマを身体行為レベルで蓄積された社会的記憶とつなげて治療するという観点は乏しかった。(村本, 2008) このため日本では、客観的事実の伝達に偏った歴史教育により戦争体験が生きた感情を伴うことなく伝えられ、戦後世代にとって戦争の記憶が自分たちの生と切り離されていく一方で、Kleinman たちが明らかにしたように、戦争による暴力が身体行為レベルで現在に至るまで確実に伝達されてきた。こうした認知されないトラウマは無意識裡に暴力として行動化されたり鬱や自傷などの症状として日本の現代社会に影を落としていると考えられる。

ポストモダン理論が示したように、歴史には唯一絶対に正しい語りは存在しない。例えば、長い間のアパルトヘイト政策が生み出した憎悪と怒りに直面した南アフリカで人種間対立の和解を目指して設けられた「真実和解委員会 Truth and Reconciliation Commission (TRC)」は、「真実」にいくつかの異なるあり方があることを指摘している。TRC によれば、①事実としての、あるいは法廷の真実、②個人にとっての、また語りとしての真実、③社会的あるいは対話的真実、④癒し、修復する真実、の四つがあるという。(永原陽子 2004) これまでとかく、「事実としての真実」に焦点を当てられてきた戦争や歴史の問題に、このモデルの第二の「語りとしての真実」や第三の「対話的真実」には、一人一人の様々な思いや感情が絡んでおり、それらを一つ一つ解きほぐしていくことで、戦後世代としてそこから癒しや関係性を修復する真実につながる道を開くことが必要だ。Volkas が長年開発してきた Healing the Wounds of the History

は、体験心理学のアプローチとして、生きた感情を大事にしながら、こうした個人の物語をより多くの人たちと共有していくための優れた方法である。

一人称の語り③：「南京を想い起こすセミナー 2011」の感想 1

2007年のVolkasのプレイバックシアターに参加した村本は、その年の11月に南京で行われた「Remembering Nanjing」にも参加し、その時中国の学生たちと交わした約束を果たすため、Volkasと共に2009年再び南京を訪れた。今回のセミナーは、その延長上にある。Volkasが率いる4日間のHWHセミナーの間、ぼくは何度か積極的に言葉を発する機会をもった。

まず初日に少人数のグループで日本人と中国人というアイデンティティについて話し合った後、全員が輪になってその真ん中に中国人と日本人を象徴する二つのイスを向かえあわせに置き、それぞれの立場から言葉を述べあうエクササイズがあった。その時僕は、まず中国を象徴するイスに座り、日本人のイスに向けて日本を非難する声をあげた。それは、僕が10数年に渡って聞いてきた中国人の声を表現したものだ。そしてその後様々な参加者が、時には中国人が日本人側に立ったりしながら、それぞれの思いを述べあった。その最後に僕は、立場を代えて、日本の「無関心世代」の声も表現した。それは、自分自身の中に、中国人、日本人を問わず様々な立場の声があることの確認でもあった。

自分が「日本人」としてよりも、まず人間としてその場にいること。体験的心理学の枠組みの中では、国籍としての「日本人」「中国人」ではなく、それぞれの歴史を背負った身体としての日本人・中国人がいて、その身体からの声をできるだけ表現していくことが尊重される。日本人と中国人、その区別は青森県人と奈良県人、山口県人と福島県人の違いとどこが違うのか、言葉や習慣なのか、自分がそれぞれの声をどういう存在として発しているのか、自分の中の実験でもあった。Volkasが指導するこのメソッドでは、安全な空間でこうした様々な声を表現しそれを分かち合うことができる。それは自分の中、あるいは他者の中にある多様な声に耳を傾け、その声を受けとめるための機会となる。しかし、こうした実験空間において生じた経験はそのまま被害者の「癒し」につながるとは限らないし、その声や体験を「真実」として政治的コンテクスト

にどのように繋げていくのかは、まだまだ未知数だ。

被害／加害から共生へ：歴史・平和教育の方向性

戦後 50 周年を機に 1990 年代半ばから、日本では戦争責任のあり方について活発な議論が展開されるようになった。(安彦他 1999) なかでも「自由主義史観研究会」を中心とした活動や「新しい歴史教科書をつくる会」の小林よしのり氏らによる、「従軍慰安婦」や「南京大虐殺」を「自虐史観」として批判する言説は多くの若者の共感を得た。この事態に対し、教育学者の佐藤学(1998)は、「新しい歴史教科書をつくる会」は、戦後の歴史教育のトータルな否定というより「戦後の歴史教育の基本的な枠組みを骨格においては踏襲している」ことを指摘し、戦後民主主義における歴史教育を次のように批判している。

戦争を過ぎ去った事柄として消去し死者の声を抹消するという離れ業を通して、戦後の教育は平和と民主主義の教育への速やかな移行を実現したのである。もちろん、一人ひとりの身体には煩悶と慟哭を伴う生々しい戦争の記憶が逡巡していたのだが、少なくとも学校教育で教えられる公定の歴史においては、その身体の記憶は抹消され、祖国の再建へと明るく邁進する教育が施されたのである。(p.310)

そして、佐藤は戦後の歴史教育のあり方を振り返って新たな歴史教育のあり方を「一人ひとりの身体を抱えている多様な戦争の記憶と歴史を多様なままであるがままに尊重しあうことが、歴史を語り伝承する教育の原則であろう」とし、『『善』とか『悪』とか『正しい』とか『過ち』というラベルで一括するのではなく、この日本の近現代を生きた一人ひとりの複数の歴史をそのまま『日本人の歴史』の事実として受容する教育が必要である」と主張している。

教育学者高橋舞(2009)は「人間成長を阻害しないことに焦点化する教育学—いま必要な共生教育とは」の中で、「新しい歴史教科書をつくる会」の小林よしのりや「自由主義史観研究会」が主張した「日本人性」を取り戻すことで現代の問題を解決できるとする言説を批判的に検討している。その検討を通して高橋は、彼らの主張が浸透していく日本社会が抱える「能力主義に基づく格

差拡大による問題と、すべての問題を網羅する根本的問題として『関係性の危機』の問題」に対する本当の原因と解決策を提示することの必要性を指摘している。

高橋（2009）にとって、『『被害者のための自己教育』から『加害者のための自己教育』へのパラダイム・シフトが必要なのは、既存の教育学が他者への暴力—他者の植民地化—を推奨し、また自己への暴力—自己の植民地化—をも強制するものであったため』（p.274）である。この点を踏まえて、高橋は問題の根源に「出会いを妨げる近代性」があることを次のように指摘している。

現代の教育問題の原因は『日本人』性の欠如でも、近代の未達成でもなく、『植民地主義』という他者との『出会い』を妨げる、近代性の継続にあったといえる。単に効率的植民地化を可能にする集団の境界線が変動（日本国民→日本人エリート）しているだけで、内実は戦争時代と変わらずに『出会い』を排除し、相変わらず植民地化し、植民地化され続けている結果である。誰に出会うことも出会われることもない、ゆえに私たちは、孤独、関係性の危機を感じるのである。この“出会わないことで維持される社会——人の人間ではなく『何者』かになることを強制される社会——”としての近代が乗り越えられない限り、現代的教育問題は解決されず、私たちは本当に解放され自由になることはない。（p.276–277）

一人称の語り④：「南京を想い起こすセミナー 2011」の感想 2

セミナーの最終日の午前中、燕子磯にセミナー参加者全員で出かけた。2007年に来た時も同じ記念碑に献花をしたが、今回その時と大きく違っていたのは、中国人の参加者と日本人の参加者がペアになって献花をしたことだった。日中の若者が手を取り合って一緒に階段を上り、献花し犠牲者に祈りを捧げる姿を見たとき、1996年以来答えのない道を歩んできた僕の中で一つの方向性が見えたように思えた。

そして、その日の午後会場の南京師範大学に戻ってセミナーのクロージングが行われ、その最後に中国人と日本人が向き合って立ち、互いに何を求めているかを率直に述べた。「それぞれが語る言葉は個人的な声であると同時に集

合的な声だと考えてほしい」という Volkas の言葉に促され、中国人の参加者からは、「右翼を言い訳にしないで、積極的に何かを変えてほしい」「日本人が跪いて謝のを見ると心が痛む。そんな姿を見たくない。何か行動を起こして欲しい」という、それまでに聞くことのなかった率直な言葉が発せられた。そして日本人からも、「日本国内で右翼の声ばかりが目立つようだが、日本国内でも昔から一生懸命教育をしている人たちがいる。しかし、そういう人たちも最近中国が嫌いになってやめてしまう人が多くなっている。どこかで折り合いをつけて僕たちを応援してください。お願いします」という声が聞かれた。そして、互いが率直な声を発しそれに率直な応答を返した後、日本人と中国人は互いに歩み寄り、握手をしたり抱き合ったりした。二つのグループの間の床に座りこんでその成り行きをずっと眺めていた僕は、その姿をしっかりと目に焼き付けておこうと思った。それは、言葉にできないほど暗い闇の歴史に接し、互いの痛みを感じあい、そこから未来に向けて何をすべきかを一人一人が真剣に問う時間を一緒に過ごすことによって可能になったひとつの「出会い」のように感じたからだ。

参考文献

- 安彦一恵・魚住洋一・中岡成文 1999 「戦争責任と『われわれ』—『歴史主体論争』をめぐる」 ナカニシヤ出版
- Connerton, Paul. 1989 How Societies Remember. Cambridge University Press
- 福間良明 2009 「『戦争体験』の戦後史：世代・教養・イデオロギー」 中公新書
- Griffin, Susan. 1992 A Chorus of Stones: The Private Life of War, Anchor Books.
- Johnson, Don Hanlon. 1992 Body: Recovering Our Sensual Wisdom, North Atlantic books.
- Kleinman, Arthur, et al. (Eds.) 1997 Social Suffering, University of California Press

村川治彦

2001 (a) アジアとその歴史を再認識：これも多民族国家ならはのボランティアかもしれない

「サンフランシスコ タウンガイド完全版」所収 アスペクト
234-236

2001 (b) ワールドワーク (b) アジアン・ワールドワーク

「プロセス指向心理学入門—身体・心・世界をつなぐ実践的心理学」
所収 春秋社 157-167

村本邦子 2010「戦争によるトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～
国際セミナー『南京を思い起こす 2009』の記録」立命館大学人間科学
研究所ヒューマンサービスリサーチ 19,

永原陽子 2004 和解と正義：南アフリカ「真実和解委員会」を越えて（内
海 愛子・山脇 啓造 編）「歴史の壁を超えて—和解と共生の平和学グ
ローバル時代の平和学 3」法律文化社

佐藤学 1998 個の身体からの記憶からの出発：戦後の歴史教育への反省
（小森陽一・高橋哲哉 編）「ナショナル・ヒストリーを超えて」東京
大学出版会

高橋舞 2009「人間成長を阻害しないことに焦点化する教育学—いま必要
な共生教育とは」ココ出版

Tanahashi, Kazuaki 2007 “Remembering Nanjing (Nanking)-Report on the
international conference, 70th anniversary of the Nanjing Tragedy” A
World Without Armies: Berkeley, California.

Taylor, Eugene. 2000 Shadow Culture: Psychology and Spirituality in Amer-
ica. Counterpoint

張連紅 2010「トラウマを癒す：中日関係における避けられない課題」立
命館大学人間科学研究所ヒューマンサービスリサーチ 19,